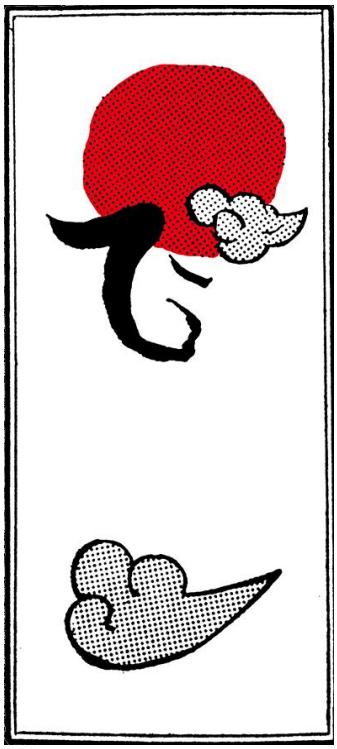

第13號
月1回發行
ひの心を繼ぐ會
〒799-1336
住所:愛媛縣西條市
上市甲720-1

領綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は國家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（五）（大和世界の建設）

竹葉　秀雄

古事記

北と一（はじめ）

冬至

大正天皇御製の詩　明治三十四年御製

木葉紛紛散有聲　木葉紛紛、散じて聲あり
待看明歲競春榮　待ち看ん明歲春榮を競ふを
可知天地陰窮處　知る可し、天地陰窮る處
來復一陽今日生　來復の一陽、今日生ず

冬至は陽暦の十二月二十一・二日頃で、此日は、太陽が赤道の南二十三度半の所に在る。此緯度を冬至線（夏至は赤道の北二十三度半で、夏至線といふ）と言ひ、此線より太陽は再び北に向つて復る。此日は夜最も長く晝最も短し。一陽來復、冬至の日に至り陰氣窮つて一陽初めて生ずる。靈知を與へられてゐる人間は、此の日に瞑想し、日、月の運行と、宇宙の法則、その作用、その力あるもの、あらしめるものを思ひて畏敬し、その神祕に禮拜しないではゐられないのである。

○

乾坤一轉新
神道煌不變

一、

輿地轉虛空　輿地　虛空に轉ず
今辰傾北極　今辰　北極に傾く
傾終復且還　傾け終りて　且（まさ）に還らんとす
猗與維何力　猗與（ああ）　維（こ）れ何の力ぞ

二、

短日長陰盡　短日長陰盡く
一陽來復玄　一陽來復玄なり
曉天東牖裏　曉天　東牖の裏
潔齋坐凝然　潔齋　坐して凝然

○

易經を見るに、

復䷗震下坤上　地雷復

卦辭に曰く。復は亨る。出入疾（やまいな）无く、朋（とも）來つて咎（とがめな）无し。其の道を反復し、七日にして來復す。往く攸（ところ）有るに利ろし。

彖に曰く。復は亨るとは剛反ればなり。動いて順を以て行く。是を以て出入疾无く、朋來つて咎无し。其の道を反復して、七日にして來復すとは、天行なり。往く攸有るに利ろしとは、剛長ずればなり。復は其れ天地の心を見る乎。

象に曰く。雷・地中に在るは復なり。先王以て至日に關を閉ぢて、商旅行かず。后・方を省みず。

とある。天地の運行　舊暦九月を山地剥䷖とし、十月を坤爲地䷁として、十一月地雷復䷗に至りて一陽來復一年十二月に就いていへば一爻を一月とするも、ここでは一日を一爻として七日にして陽生ずる云ふ。天地の心をここに見ると云ひ、この日は齋戒沐浴して、關を閉ぢ商旅も行かしめず、人君も四方の巡省を休めるのである。

地球に生を享けた人間が、その地球運行の中にあつて、その運命の中にあつて、冬至に天の心（相）を觀、そこに虔しみ畏み北を極として、そこに一陽を感じ、物の「一」を觀たのは當然のことであるし、叡知である。天の啓示がここにある。

「一」を北とした場合、方位を如何に定めるか。何によつて、四方八方、東西南北を決めるのか。ここ重大なる問題がある。神理がある。「本來無東西、何處有南北、迷故三界城、悟故十方空」なる宇宙の中の地球の時・處・位の一點にあつて、東西南北を定めるのは決して迷ふが故でなく、嚴然たる神の理法なのである。神の理法とは何か。「右旋左旋」である。天の御柱を中心にして、伊邪那岐神が「汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢ひて美斗の麻具波比せむ。」との神言である。その一點は「天の御柱」である。先づその天の御柱を見立てねばならない。かくして、成り餘れるところを成り合はぬ處に刺し塞ぐべく右旋、左旋が行はれる。地球は、自ら右に旋りながら、太陽を右旋する。太陽もまた自ら右旋しつつ、銀河系の中心を右旋する。月もまた、自ら右に廻りながら地球を右旋する。豈天體のみならんや（注、今太陽の惑星中で天王星のみ左旋するとされてゐる。その深意は。）人間の眼に見へぬ原子の世界においても、原子核を中心として、陰電子は右旋してゐる。

左は「日足る」で、陽であり、右は「水ぎり」水の漲ることで、陰である。水は柔であり、隨ふもので、太陽の陽に對して、地球は陰である。陰（隨ふもの）なるものは右旋し、陽（主なるもの）なるものは左旋する。「女人を先立ち言へるはふさはず」の神理、夫唱婦隨の道がある。そは、男尊女卑に非らず、男尊女尊、皆「人」にして「彦」、「姫」、日の靈を授かる、「神の分身」である。唯机は物を置く物、湯呑はその上に置かるる物の秩序があるのである。

「一」は初で止まらない。生長し、流轉してやまない。「うましあしかび」（後述）である。一は二を生じ、二は三を生じ、萬物を生じる。奇數は陽にかなひ、偶數は陰にかなふ。奇數は剛にして統一されて二分さるることなく、男の相であり、偶數は柔にして二分される。女の相である。

（以下次號）

第一章　農の哲學的考察

～第三節　農本生活　第二項　本末關係～

菅原　兵治

人物と方策

最後に人物と方策との關係を考察して見たいと思ふ。或る事を行ふに當つて、其の中心になる人物が本であつて、それを行ふ組織制度は末である。だから本たる人物の在る處に生れ出でた方策にして初めて生命があり、生長があるのである。かくて產業革命後の大工場組織の工業經營や、資本主義下の大商店の經營等は、何れかといへば人間が機械若しくは組織の番人化されるが、東洋本來の農本思想乃至制度の下に於ける農業經營に於ては、單なる機械や組織よりも「人」其のものを重んずるのである。四時の變化の中に生きた作物や家畜を相手として其の生命を育んで行く農業に於ては、如何に巧妙なる農具を備付くることよりも、一人の最も優れたる農夫を求むることが農業經營に成功する所以ではあるまいか。

而してその事は一歩を進めて農村經營に於ても然りである。中庸にも「文武の政は布きて方策に在り。其の人存すれば則ち其の政擧り、其の人亡ければ則ち其の政息む。」といって居るが、是實に人を本とせる東洋的な德治政治の原則を明示したものである。農村生活は本の生活である。かかるが故に農村に於ては、制度組織よりもその中心になる人物を重んぜねばならぬ。早い話が優良農村といふものを觀ても、必ず中心人物がある。故に農村を振興させるものは極言すれば、農會でもない、產業組合でもない、役場でもない、學校でもない。唯だ生きた人物である。其の生きた人物が產業組合長になつて居る村では、產業組合中心の經營が行はれて居る。さういふ人が村長になれば役場中心の經營が行はれて居る。かういふ人が農會長になれば農會中心の經營が行はれて居る。其の人が校長になれば學校中心の經營が行はれて居る。農村經營の肝要は組織にあらずして實に人である。このことに氣付いてこの農本原理に立てる農村振興を圖らむとするならば、先づ以て人物の養成――その人物の活動といふことに重きを置かねばならぬのである。勿論、商工業的經營、都會的生活だから人物を要せぬといふのではない。ただ農村生活の特質上特に中心になる人物の如何によつて影響する處が大きいことを力說するのである。（情愛と理論の項等參照考察せられたならば、肯かれるものがあるであらう。）

川面凡兒翁の哲學

三浦　夏南

川面凡兒翁は先月號にも書いた通り、禊行の復活を以てその名を世に知られた偉人である。しかし、翁の行的、實踐的側面とは對照的にその著書には、非常に深淵にして詳細な哲學が宇宙觀、世界觀として展開されてゐる。實踐的な人間ほどその背景には巨大な哲學理論の骨骼があるとは良く言はれることである。江戸時代前期の學者山崎闇齋先生も、實踐的勤皇思想を後代に永く傳へた碩學として著名であるが、その表に現れた信念と熱意とは裏腹に、先生の學問には徹底的な哲學的裏附けがある。川面翁もその例に洩れず、情熱的信仰者にして、透徹した哲學を打ち立てられた方であり、翁の背骨となる哲學には壓倒されるものを感ずる。

川面翁の哲學は廣範にして此處に安易に要約することは不可能であるが、翁の著書に學ばせて頂く中で、繰り返し示され、心に殘つて居ることについて少し書いてみたいと思ふ。翁曰く「一として邪道のみのものなく、魔法のみのものもなく、均しく是れ根本大本體の天照なり、發顯なり。天照發顯としての一大活躍態なり。正邪一道、神魔一體、或は正となり、或は邪となり、或は魔、或いは神たりつつあるに過ぎず。」この趣旨の言葉は形を變えて隨所に表現されてゐる。ここでは、正と邪、神と魔について說かれてゐるが、これは心と物、主觀と客觀、文明と自然、といつたあらゆるものに適應して教へられてゐる。川面翁が言はれるに世の中で說かれる教への殆どが相對物のどちらかを根本とし、主軸として世界觀を構築してゐる。例へば物心の關係で言へば、心を主とすれば、物が從となり、心から物が發生する世界觀を形成してゐる。物の立場から言へば、ちやうどその逆となる。しかし實際には物から心が生ずるでもなく、心から物が生ずるでもない。兩者は一體不可分であり、物から言へば、心が裏であり、心から言へば物が裏である。そして物となり、心となるその本體が靈魂であり、これこそ眞の意味での根本であるといふ。この根本を體驗として摑む修行が禊である。この世界は物心一如の世界であり、それが最も自然の姿であるが、現代人としては最も入り難い道であると思ふ。常識的現實に處してゐると「心を變へれば人生が變はる」といつた言葉や、「形を變えれば心が整ふ」といつた文句は心に入り易く、實踐に移しやすい。しかし本當の現實は心だけで形がなければ實がなく心すらも變はらず、形だけで心がついて來てゐなければ、形も滅びるものである。物事は正義だけで進むものでなく、必ず裏に邪惡があり、どちらか一方に偏つた解釋と實踐は却つて矛盾を生んでしまふ。明治維新の王政復古の裏には過剩な西洋化を既に孕み、戰國の混亂は却つて維新の源流となる。まさに「正邪一道、神魔一體、或は正となり、或は邪となり、或は魔、或いは神たりつつあるに過ぎず。」といはれた川面翁の言葉通りであり、大切なことはそれらの根柢にある英靈を把握し、雙方を生かす躍動的な行き方を目指すことである。ここに川面翁が自身の教へを「全神教」と宣言される所以があると思ふ。

農業をしてゐるとよりこのことを痛切に考へることが多いかもしれない。機械化と農藥を基本とした近代農法は物質で以て農業を割り切るものであり、逆に古代原始の世界に思ひを馳せ、耕すことさへも否定するに至る自然農法は近代農法とは正反對の行き方である。人爲を以て自然を制するか、自然を以て人爲を制するかであり、先述の物と心との論爭にも似てゐる。然しながら現實は農業そのものが文明であり、人爲や技術を否定して農業を考へることは出來ない。徹底的に自然な農業とは結局農業の拋棄へと歸結し、狩獵採集生活へと逆行することを意味してゐる。それと同時に行き過ぎた近代農業も自明のことながら、農業の本質を破壞し、その終局は農業の破綻へと直結してゐる。兩方が自らの在り方を以て農業を定義付けながら、その究極は自らすらも破壞するに及んでゐることは悲劇的なことである。どちらかで以て農を割り切ることは分り易く行ひ易いことではあるが、我々は雙方を貫通する根本、本質を把握し、兩者を眞の意味で生かす最も古代的で新しい農業を目指していかなければならない。

川面翁の教說は徹底的であり、全面的であるため、却つて摑みどころがなくみへるが、その實は本居宣長先生が「學問は深く、廣くせねばならぬ」と自らの長い修學の中から表明された如く、物心一如の幽遠な體驗から現はれ來るものである。この分かりさうで分かり難いところを摑めるやうに我々も農業に取り組みながら、深く農について考へて行きたい。

とよくも農園だより

三浦　美恵

とよくも農園にも溫かい日差しが降り注ぎ、春に植ゑつけをした野菜達が、ぐんぐんと芽を出し、葉を大きく廣げてゐます。露に濡れた野菜を心地よい風が搖らしてゐる様子は、農作業で疲れた心身を癒してくれます。

今月はケールの管理、夏野菜の畑の準備、新たな野菜を育てる土地の購入、葉物の產直市への出荷をしました。今回始めて本格的に使用したマルチは、春の大風に何度も吹かれ、煽られ、その度に土をかけたりマルチキーパーで固定したりととても苦勞しました。近日中に機械でマルチが張れるマルチャーを購入しようと檢討中です。以前は一つ一つ鍬や鎌で草を刈つてゐたことを考へると、張つてゐれば草を抑へることができるマルチはたいへん便利です。あまりにも機械や文明の利器に賴ると農業の本質を見失つてしまひますが、さうかと言つて古代のままで一切機械を使わない農業にも疑問を感じます。神道の本質は古代から變はらないけれども、形は少しづつ變化してきてゐるやうに、農業も適度に機械に賴りながら進めて行かうと思つてゐます。夏野菜は、トマト、キュウリ、ナス、ピーマン、オクラ、シソ、ズッキーニ、空心菜、ツルムラサキ、スイカを植ゑました。昨年は蟲にやられたり水不足で駄目になつたりしたものも多かつたので、今年は確實に獲れるやう、苗を購入してたつぷりと水やりをしました。また購入した新たな土地では、ハウスを建ててアスパラガスの栽培をしようと考へてゐます。

順調にとは言へませんが一歩一歩進んでゐるとよくも農園に、今月は大きな出來事がありました。豫定日を六日も過ぎた四月十四日の朝九時四十分、三浦颯の長男、蒼（あおい）が二九七〇gで元氣に誕生しました。出產直後からおつぱいをよく飲み、毎日元氣に泣いてゐるさうです。今は里歸りをしてゐるため、私たちは新たな家族の歸りを首を長くして待つてゐます。六人になつた三浦家は今までより一層賑やかになることと思ひます。農業と子育ては家族の協力無しでは不可能です。六人の結びの力で、五月も日々畑仕事に勵みたいと思ひます。

★活動報告

・四月九日（火）勉强會『農士道』を開催。
・四月二十三日（火）勉强會『大學』を開催。

★今後の豫定

・五月十四日（火）十九時～二十一時　『農士道』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

・五月二十八日（火）十九時～二十一時　『大學』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

★一燈照隅　萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周圍の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

・一般會員　三千圓
・贊助會員　一萬圓
・特別贊助會員　三萬圓
・支援會員　一萬圓